



Sun N1 Service Provisioning System ユーザーズガイド (WebSphere Plug-In 3.0)



Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-6495-10
2006年4月

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

U.S. Government Rights Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品に含まれる HG-MinchoL、HG-MinchoL-Sun、HG-PMinchoL-Sun、HG-GothicB、HG-GothicB-Sun、および HG-PGothicB-Sun は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。HeiseiMin-W3H は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、docs.sun.com、Java、および N1 は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標、登録商標もしくは、サービスマークです。

サンのロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、および Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

Wnn は、京都大学、株式会社アステック、オムロン株式会社で共同開発されたソフトウェアです。

Wnn6 は、オムロン株式会社、オムロンソフトウェア株式会社で共同開発されたソフトウェアです。Copyright OMRON Co., Ltd. 1995-2000. All Rights Reserved. © Copyright OMRON SOFTWARE Co., Ltd. 1995-2002 All Rights Reserved. ©

「ATOK」は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。

「ATOK Server/ATOK12」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK Server/ATOK12」にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれる郵便番号辞書(7桁/5桁)は日本郵政公社が公開したデータを元に制作された物です(一部データの加工を行っています)。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれるフェイスマーク辞書は、株式会社ビレッジセンターの許諾のもと、同社が発行する『インターネット・パソコン通信フェイスマークガイド』に添付のものを使用しています。

Unicode は、Unicode, Inc. の商標です。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK のグラフィカル・ユーザインタフェースを実装するか、またはその他の方法で米国 Sun Microsystems 社との書面によるライセンス契約を遵守する、米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法(外為法)に定められる戦略物資等(貨物または役務)に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Sun N1 Service Provisioning System User's Guide for WebSphere Plug-In 3.0

Part No: 819-4455-10

目次

はじめに	9
1 WebSphere 3.0 プラグインの概要	13
WebSphere 3.0 プラグインの目的	13
WebSphere 3.0 プラグインに含まれるもの	13
WebSphere 3.0 プラグインを使用するための要件	14
2 WebSphere 3.0 プラグインのリリースノート	15
インストール上の問題	15
実行時の問題	15
Windows x86: 実行されていないアプリケーションインスタンスのアンインストールに 失敗する (6385493)	15
3 WebSphere プラグインのインストールと構成	17
WebSphere プラグインの入手	17
Solaris への WebSphere プラグインの追加	18
▼ Solaris 用の WebSphere プラグインを追加する	18
Linux への WebSphere プラグインの追加	18
▼ Linux 用の WebSphere プラグインを追加する	18
Windows への WebSphere プラグインの追加	18
▼ Windows 用の WebSphere プラグインを追加する	19
Sun N1 Service Provisioning System への WebSphere プラグインのインポート	19
▼ ブラウザインタフェースを使用して WebSphere プラグインをインポートする	19
▼ CLI を使用して WebSphere プラグインをインポートする	20
▼ WebSphere プラグインのマスターサーバーを構成する	20
アップグレード関連の注意事項	21
▼ 旧バージョンのコンポーネントにアクセスする	21
WebSphere プラグインへのパッチの適用	22

4 WebSphere 3.0 プラグインの使用法	23
WebSphere Application Server Version 5.1 環境の構成	24
プラグインの規定	24
全体的な前提条件	25
プロセスの概要	25
WebSphere インフラストラクチャーコンポーネントの作成	26
▼ スタンドアロン WebSphere アプリケーションサーバーをインストールする	26
▼ アプリケーションサーバーインスタンスを作成する	29
▼ 配備マネージャーをインストールする	31
▼ 配備マネージャーにノードを追加する	33
▼ WebSphere クラスタを作成する	34
▼ クラスタメンバーを追加する	36
WebSphere 5.1 環境の構成	37
▼ JDBC Provider コンポーネントを作成する	37
▼ JDBC Provider コンポーネントをインストールする	38
▼ データソースコンポーネントを作成する	39
▼ データソースコンポーネントをインストールする	40
▼ JVM コンポーネントを構成する	41
▼ JVM コンポーネントをインストールする	42
▼ J2C 認証エイリアスを作成する	43
▼ J2C 認証エイリアスを削除する	43
WebSphere 5.1 インフラストラクチャーコンポーネントの管理	44
▼ スタンドアロンシステムのアプリケーションサーバーを起動または停止する	44
▼ スタンドアロンシステムのアプリケーションサーバーをアンインストールする	45
▼ アプリケーションサーバーインスタンスを起動または停止する	45
▼ アプリケーションサーバーインスタンスをアンインストールする	46
▼ 配備マネージャーを起動または停止する	47
▼ 配備マネージャーをアンインストールする	47
▼ クラスタを起動または停止する	48
▼ クラスタをアンインストールする	48
▼ クラスタメンバーを削除する	49
WebSphere 5.1 で作業するときのコマンド行インタフェースの使用法	50
Sun N1 Service Provisioning System コマンド行インタフェースの使用法	50
WebSphere 5.1 の wsadmin スクリプトの使用法	50
▼ wsadmin スクリプトを実行する	50
WebSphere アプリケーションを配備するためのコンポーネントタイプの使用法	51
エンタープライズアプリケーション (EAR) コンポーネントタイプ	51

WebSphere 5.1 デモの実行	54
▼ Oracle RDBMS でデモを実行する	54
▼ DB2 RDBMS でデモを実行する	56
▼ Oracle RDBMS デモのリソースを削除する	58
▼ DB2 RDBMS デモのリソースを削除する	58
プラン	59
障害追跡	59
WebSphere 3.0 プラグインのアンインストール	60
▼ WebSphere 3.0 プラグインをアンインストールする	60
索引	63

表目次

表 4-1	共通のタスク名	24
-------	---------------	----

はじめに

このマニュアルでは、Sun N1™ Service Provisioning System ソフトウェアを使用して、WebSphere 5.1 アプリケーションサーバー製品、アプリケーション、およびファイルを取得して配備する方法について説明します。

対象読者

このマニュアルの主な対象読者は、WebSphere 5.1 の機能を Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに組み込もうとしているシステム管理者および Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアのオペレータです。このようなユーザーは、次のことに精通している必要があります。

- Sun N1 Service Provisioning System 製品
- UNIX® と Windows の一般的なコマンドとユーティリティー
- WebSphere 5.1 製品の一般的な概念と管理機能

お読みになる前に

まだ Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに精通していないユーザーは、次のマニュアルをお読みください。

- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』
- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』
- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 リリースノート』

マニュアルの構成

第1章では、プラグインソリューションの概要について説明します。

第2章では、WebSphere 5.1 プラグインの最新情報および既知の問題について説明します。

第3章では、このプラグインをインストールして構成する方法について説明します。

第4章では、プラグインを使用したアプリケーションサーバー製品、アプリケーション、およびファイルの入手および配備方法について説明し、プラグインで提供されるコンポーネントタイプを示します。

Sun 以外の Web サイト

このマニュアルで参照している Sun 以外の URL は、追加の関連情報を提供します。

注-このマニュアル内で引用する Sun 以外の Web サイトの可用性について Sun は責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関して一切の責任を負いません。こうしたサイトやリソース上で、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことに伴って発生した(あるいは発生したと主張される)実際の(あるいは主張される)損害や損失についても、Sun は一切の責任を負いません。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun の Web サイトでは、以下の追加情報を提供しています。

- マニュアル (<http://jp.sun.com/documentation/>)
- サポート (<http://jp.sun.com/support/>)
- トレーニング (<http://jp.sun.com/training/>)

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:

表 P-1 表記上の規則 (続き)

字体または記号	意味	例
<code>AaBbCc123</code>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、 <code>rm filename</code> と入力します。
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第5章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	<code>sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'</code>

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

WebSphere 3.0 プラグインの概要

この章では、Sun N1™ Service Provisioning System を使用して WebSphere 5.1 アプリケーションをプロビジョニングするための一般的な情報について説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 13 ページの「WebSphere 3.0 プラグインの目的」
- 13 ページの「WebSphere 3.0 プラグインに含まれるもの」
- 14 ページの「WebSphere 3.0 プラグインを使用するための要件」

WebSphere 3.0 プラグインの目的

Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアは、WebSphere 5.1 アプリケーションサーバー製品をサポートするための拡張機能を提供します。アプリケーションサーバー、配備マネージャー、およびクラスタをプロビジョニングソフトウェアでインストールすると、WebSphere 5.1 インフラストラクチャーをプロビジョニングできます。インストール後、アプリケーションサーバーを起動または停止することによって、WebSphere 5.1 環境を管理できます。以前インストールされていたアプリケーションも、取得して、企業全体に配備できます。

WebSphere 3.0 プラグインに含まれるもの

WebSphere プラグインには、WebSphere 5.1 アプリケーションサーバー製品と WebSphere に配備されたアプリケーションを構成およびインストールするためのいくつかのコンポーネントとプランが含まれます。

- 企業アプリケーション (EAR ファイル) をインストールするためのプラン
- WebSphere 5.1 インフラストラクチャーをサポートするためのコンポーネントとプラン
 - WebSphere スタンドアロンアプリケーションサーバー
 - WebSphere アプリケーションサーバーのインスタンス
 - WebSphere Network 配備マネージャー

- WebSphere クラスタ
- WebSphere クラスタメンバー
- WebSphere セル
- WebSphere 5.1 アプリケーションサーバー上のアプリケーションを取得して配備するためのコンポーネントとプラン
- WebSphere 5.1 環境を構成するためのコンポーネントとプラン
 - データソース
 - JDBC プロバイダ
 - Java™ プラットフォーム用の仮想マシン (Java 仮想マシン、JVM™ マシン、または JVM™ ツールインタフェース)
- WebSphere 5.1 コマンドをプロビジョニングシステムのブラウザインタフェースから実行するためのコンポーネントとプラン

WebSphere 3.0 プラグインを使用するための要件

WebSphere プラグインが WebSphere Application Server Version 5.1 をサポートするプラットフォームは次のとおりです。

- Solaris 8 (SPARC 版)
- Solaris 9 (SPARC 版)
- Red Hat Linux AS 2.1
- Red Hat Linux AS 3.0
- SUSE Enterprise Linux 8.0
- SUSE Enterprise Linux 8.1
- SUSE Enterprise Linux 8.2
- SUSE Enterprise Linux 8.3
- SUSE Enterprise Linux 9.0
- Windows 2003
- AIX 5.1、5.2、および 5.3

WebSphere ソフトウェアを使用するための詳細な要件については、IBM のマニュアルを参照してください。ハードウェアとソフトウェアの要件についての詳細は、[WebSphere Application Server の補足資料](http://www-306.ibm.com/software/webservers/appserv/doc/v51/prereqs/prereq51.html) (<http://www-306.ibm.com/software/webservers/appserv/doc/v51/prereqs/prereq51.html>) を参照してください。

WebSphere 3.0 プラグインのリリースノート

この章では、WebSphere 3.0 プラグインの最新情報、および既知の問題について説明します。

この章では、次の項目について説明します。

- 15 ページの「インストール上の問題」
- 15 ページの「実行時の問題」

インストール上の問題

インストールに関する問題はありません。

実行時の問題

WebSphere 3.0 プラグインの実行時には、次の問題が発生することが判明しています。

Windows x86: 実行されていないアプリケーション インスタンスのアンインストールに失敗する (6385493)

WebSphere 3.0 プラグインを使用して停止されている AppServer インスタンスを削除しようとすると、次のエラーが発生して DeleteAppInstance プランが失敗します。

Server is not running

回避策: アプリケーションインスタンスを起動してから、Windows でアンインストールを行なってください。

WebSphere プラグインのインストールと構成

この章では、WebSphere プラグインをインストールして構成する方法について説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 17 ページの「WebSphere プラグインの入手」
- 19 ページの「Sun N1 Service Provisioning System への WebSphere プラグインのインポート」
- 21 ページの「アップグレード関連の注意事項」

WebSphere プラグインの入手

WebSphere 5.1 プラグインを入手する手順は2段階に分かれます。はじめに WebSphere 5.1 プラグイン JAR ファイルが含まれたパッケージファイルをシステムに追加する必要があります。そのあとに WebSphere 5.1 プラグイン JAR ファイルをインポートします。

IBM WebSphere Application Server 5.1 ソリューションは、Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに対するプラグインとしてパッケージ化されています。プラグインは Java™ アーカイブ (JAR) ファイルとしてパッケージ化されています。WebSphere Application Server ソリューション用のプラグインファイルは、Sun N1 Service Provisioning System Supplement CD または Sun Download Center から入手できます。

パッケージファイルをシステムに追加すると、WebSphere プラグインは2種類の JAR ファイルからインポートできます。状況に応じて、適切なファイルを選択してください。

- WebSphere プラグインをはじめてインポートする場合は、`com.sun.was_3.0.jar` ファイルを使用します。
 - 旧バージョンの WebSphere プラグインがすでにインポートされている場合は、`com.sun.was_2.0_3.0.jar` ファイルを使用します。
1. JAR ファイルを含むパッケージを追加します。
 - 18 ページの「Solaris への WebSphere プラグインの追加」
 - 18 ページの「Linux への WebSphere プラグインの追加」

- 18 ページの「Windows への WebSphere プラグインの追加」
- 2. JAR ファイルをインポートします。- 19 ページの「Sun N1 Service Provisioning System への WebSphere プラグインのインポート」

Solaris への WebSphere プラグインの追加

WebSphere 5.1 プラグインは、SUNWspswas パッケージに含まれています。

▼ Solaris 用の WebSphere プラグインを追加する

- 1 端末ウィンドウで、スーパーユーザーになります。
- 2 プラグインパッケージを含むディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを入力し、Return キーを押します。

```
# pkgadd -d . SUNWspswas
```

スタンドアロン用 JAR ファイルは /opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.was/ ディレクトリにあります。アップグレード用 JAR ファイルは /opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.was/Upgrade ディレクトリにあります。

Linux への WebSphere プラグインの追加

WebSphere 5.1 プラグインは、sun-spswas-3.0-1.noarch.rpm ファイルに含まれています。

▼ Linux 用の WebSphere プラグインを追加する

- 1 端末ウィンドウで、スーパーユーザーになります。
- 2 sun-spswas-3.0-1.noarch.rpm ファイルを含むディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを入力し、Return キーを押します。

```
# rpm -i sun-spswas-3.0-1.noarch.rpm
```

スタンドアロン用 JAR ファイルは /opt/sun/N1_Service_Provisioning_System/plugins/com.sun.was/ ディレクトリにあります。アップグレード用 JAR ファイルは /opt/sun/N1_Service_Provisioning_System/plugins/com.sun.was/Upgrade ディレクトリにあります。

Windows への WebSphere プラグインの追加

WebSphere 5.1 プラグインは、SUNWspswas.msi ファイルに含まれています。

▼ Windows 用の WebSphere プラグインを追加する

- 1 sun-spswas-3.0.msi ファイルを含むディレクトリに移動します。
- 2 sun-spswas-3.0.msi ファイルをダブルクリックします。
インストーラの GUI が起動されます。JAR ファイルは、C:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\com.sun.was ディレクトリにコピーされます。アップグレード用 JAR ファイルは C:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\com.sun.was/Upgrade ディレクトリにあります。

Sun N1 Service Provisioning System への WebSphere プラグインのインポート

ある特定のプラグインを Sun N1 Service Provisioning System に認識させるには、そのプラグインをマスターサーバーにインポートする必要があります。旧バージョンの WebSphere プラグインがすでにインポートされている場合は、新しいプラグインにアップグレードする必要があります。

▼ ブラウザインタフェースを使用して WebSphere プラグインをインポートする

プラグインをインポートまたはアップグレードするには、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の第 5 章「プラグインの管理」で詳しく説明されている手順に従います。

- 1 ブラウザインタフェースのメインウィンドウの「Administrative」セクションで、「Plug-ins」をクリックします。
- 2 「Plug-ins」ページの「Action」列で、「Import」をクリックします。
- 3 JAR ファイルの場所に移動します。
 - WebSphere プラグインをはじめてインポートする場合は、com.sun.was_3.0.jar ファイルを選択します。
 - 旧バージョンの WebSphere プラグインがすでにインポートされている場合は、com.sun.was_2.0_3.0.jar ファイルを選択します。
- 4 「Continue to Import」ボタンをクリックします。
インポートが正常に終了すると、プラグインの詳細ページが開いて、そのプラグインが提供するオブジェクトが表示されます。

▼ CLI を使用して WebSphere プラグインをインポートする

コマンド行を使用して、プラグインをインポートすることもできます。

- ▶ CLI からプラグインファイルをインポートするには、次のように入力します。

```
% cr_cli -cmd plg.p.add -path plugin-filename -u username -p password
```

- WebSphere プラグインをはじめてインポートする場合は、*plugin-filename* は `com.sun.was_3.0.jar` になります。
- 旧バージョンの WebSphere プラグインがすでにインポートされている場合は、*plugin-filename* は `com.sun.was_2.0_3.0.jar` になります。

▼ WebSphere プラグインのマスターサーバーを構成する

WebSphere プラグインを使用するには、プロビジョニングシステムの基本構成を少し変更して、アプリケーション間で通信できるようにし、プランを実行できる十分な時間を提供する必要があります。

- 1 プラグインをインポートします。
参照してください。
- 2 **WebSphere 3.0** のセッション変数を設定します。WS_DEFAULT_USER と WS_DEFAULT_PASSWORD です。
これらの変数は、スタンドアロンアプリケーションサーバーのインストール時、配備マネージャーのインストール時、およびノードの統合 (フェデレーション) 時に使用されません。
- 3 マスターサーバーを実行しているマシンに CLI をインストールします。
- 4 プロビジョニングシステムのコマンド行インタフェース (CLI) を表示する仮想ホストを作成します。

注 - 仮想ホスト cliHost が存在し、ホストタイプが `com.sun.sap#cliHT` の場合は、別の cliHost を新しく作成しないでください。

次の属性を使用して、仮想ホストを定義します。

- ホスト: **cliHost**
- ホストタイプ: **com.sun.was#cliHT**
- cliLoc: CLI への絶対パス。

たとえば、`InstallPath/cli/bin/cr_cli`

- 親ホスト: マスターサーバー上にあるリモートエージェント。
- 5 マスターサーバーを実行しているマシンにリモートエージェントソフトウェアをインストールして起動します。
 - 6 マスターサーバーの「Host Edit」ページに進んで、「Include Remote Agent On This Physical Host」オプションを選択します。
 - 7 マスターサーバーの `config.properties` ファイルを変更します。

`allowSessionIDOnHosts` を使用すると、このプラグインはコマンド行インタフェースとリモートエージェントインタフェースを通じてマスターサーバーと通信できます。

`defaultPlanTimeout` を使用すると、プランを実行できるデフォルトの時間を増やすことができます。この値の単位は秒です。この行は、デフォルトのプラン実行時間 30 分 (1800 秒) を増やす必要がある場合に追加します。この例では、100 分 (6000 秒) という値を使用します。

`pe.nonPlanExecNativeTimeout` 値の単位は秒です。この行は、`execNative` タイムアウトの時間を増やす必要がある場合に追加します。

```
pe.nonPlanExecNativeTimeout=2400
```

このファイルに次の行を追加します。

```
config.allowSessionIDOnHosts=masterserver
```

```
pe.defaultPlanTimeout=6000
```

`config.properties` ファイルのデフォルトの場所は

`/opt/SUNWnlsp/N1_Service_Provisioning_System_5.2/server/config` です。

- 8 マスターサーバーを再起動します。

アップグレード関連の注意事項

ここでは、アップグレード後に旧バージョンのコンポーネントを表示させる操作に関連する情報を示します。

▼ 旧バージョンのコンポーネントにアクセスする

新バージョンのプラグインにアップグレードすると、新しいバージョンのプラグインでインストールされたコンポーネントへのリンクが表示されるようにプラグインの「Common Tasks」ページが更新されます。この機能を使用すると、最新の機能と改善された機能を含むコンポーネントを簡単に確認できます。古い機能に依存するコンポーネントは「Common Tasks」ページにリンクされません。

以前にインストールしたコンポーネントが見つからない場合、そのコンポーネントは旧バージョンのプラグインから作成された可能性があります。

旧バージョンのコンポーネントの確認または作業を行うには、次の手順に従います。

- 1 「**Common Tasks**」 ページで、該当するコンポーネント作業をクリックします。
「**Component Detail**」 ページが表示されます。
- 2 「**Component Details**」 ページで、「**Version History**」 をクリックします。
コンポーネントとバージョンの一覧が表示されます。
- 3 該当するリンクをクリックします。
 - a. コンポーネントによる作業を行うには、バージョン番号、または使用するコンポーネントに適用される詳細リンクをクリックします。
 - b. コンポーネントがインストールされている場所を確認するには、「**Where Installed**」 をクリックします。

WebSphere プラグインへのパッチの適用

WebSphere 3.0 プラグインに適用可能なパッチは、[SunSolve \(http://sunsolve.sun.com\)](http://sunsolve.sun.com) サイトを確認します。パッチを適用するには、パッチの README ファイルの手順に従います。

WebSphere 3.0 プラグインの使用法

WebSphere 3.0 プラグインには、WebSphere 固有のプランおよびコンポーネントタイプがいくつか含まれています。このプラグインを使用すると、WebSphere 5.1 アプリケーションの操作に役立つ機能に簡単にアクセスできます。この章では、次の内容について説明します。

- 24 ページの「WebSphere Application Server Version 5.1 環境の構成」
- 26 ページの「WebSphere インフラストラクチャーコンポーネントの作成」
- 37 ページの「WebSphere 5.1 環境の構成」
- 44 ページの「WebSphere 5.1 インフラストラクチャーコンポーネントの管理」
- 50 ページの「WebSphere 5.1 で作業するときのコマンド行インタフェースの使用法」
- 51 ページの「WebSphere アプリケーションを配備するためのコンポーネントタイプ
の使用法」
- 54 ページの「WebSphere 5.1 デモの実行」
- 59 ページの「プラン」
- 59 ページの「障害追跡」
- 60 ページの「WebSphere 3.0 プラグインのアンインストール」

注 - installPath 変数の値は、/opt や c:mydir などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Windows リモートエージェントで installPath 変数を c:mydir に設定し、デフォルトのリモートエージェントディレクトリ c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\agent\c\mydir に配備されます。

WebSphere Application Server Version 5.1 環境の構成

プラグインの規定

プロビジョニングシステムを使用すると、アプリケーションをプロビジョニングおよび管理できます。

プランとコンポーネントプロシージャ

WebSphere 3.0 プラグインには、タスクを実行するためのツールとして、プランとコンポーネントプロシージャの両方が用意されています。プランを使用することによって、使用する機能に直接リンクできます。コンポーネントプロシージャを使用することによって、実行できるタスクの数が大幅に増えます。WebSphere プラグインとともに含まれるプランを使用して実行できるタスクはすべて、コンポーネントプロシージャを使用して実行できます。

タスク名

WebSphere 3.0 プラグインでは、タスクを次の4つのカテゴリに分類します。アプリケーションタスク、インフラストラクチャタスク、構成タスク、および高度なタスク。これら4つのタスクカテゴリは、実行する必要があるタスクを記述するための同じ規約に従います。

表 4-1 共通のタスク名

タスク名	説明
View All	指定したフォルダ内にある特定のタイプのコンポーネントすべてにリンクします。
Create	コンポーネントの「Details」ページにリンクして、当該タイプの新しいコンポーネントをプロビジョニングシステムに追加できます。既存のアプリケーションサーバーからインポートするか、ファイルシステムを探すことによって、新しいコンポーネントを作成できます。
Start or Stop	コンポーネントの「Details」ページにリンクして、Start or Stop コンポーネントプロシージャを実行できます。
Install、Uninstall、Remove、Join、Leave	記述した機能を生成するプランにリンクします。

全体的な前提条件

プロビジョニングシステム内のすべてのタスクは、特定のアクセス権を必要とします。WebSphere 3.0 プラグイン内でタスクを実行するには、ユーザーは、そのコンポーネントの格納されたフォルダで「Run Component Procedures」アクセス権を持つユーザーグループに属している必要があります。さらに、ユーザーは、当該コンポーネントを配備するホストセットに「Allow on Host Set」アクセス権を持っている必要があります。

アクセス権の詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の第3章「アクセス許可を使用したアクセスの制御」を参照してください。

グループメンバーシップを更新する方法の詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の「ユーザーのグループメンバーシップを変更する」を参照してください。

プロセスの概要

WebSphere 5.1 環境をプロビジョニングシステム内で作成するプロセスは、この環境をプロビジョニングシステムなしで作成するプロセスに似ています。

1. WebSphere 3.0 プラグインをインポートします。
19 ページの「Sun N1 Service Provisioning System への WebSphere プラグインのインポート」を参照してください。
2. プロビジョニングシステムのマスターサーバーを構成します。
20 ページの「WebSphere プラグインのマスターサーバーを構成する」を参照してください。
3. WebSphere 3.0 のセッション変数を設定します。WS_DEFAULT_USER と WS_DEFAULT_PASSWORD です。
これらの変数は、スタンドアロンアプリケーションサーバーのインストール時、配備マネージャーのインストール時、およびノードの統合(フェデレーション)時に使用されます。
『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第5章「セッション変数」を参照してください。
4. すべてのホストを準備します。
WebSphere 3.0 プラグインには新しいシステムサービスが含まれており、これらのサービスはプロビジョニングシステム内のすべてのホストにプッシュアウトする必要があります。『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の「物理ホストの準備」を参照してください。
5. スタンドアロンの WebSphere アプリケーションサーバーを作成します。
26 ページの「スタンドアロン WebSphere アプリケーションサーバーをインストールする」を参照してください。
6. 追加のアプリケーションサーバーインスタンスを作成します。

- 29 ページの「アプリケーションサーバーインスタンスを作成する」を参照してください。
7. (任意) 配備マネージャーを作成します。

31 ページの「配備マネージャーをインストールする」を参照してください。
 8. 必要であれば、WebSphere アプリケーションサーバーごとに配備マネージャーを追加します。

33 ページの「配備マネージャーにノードを追加する」を参照してください。
 9. (任意) クラスタを作成して、クラスタメンバーをクラスタに追加します。

34 ページの「WebSphere クラスタを作成する」と 36 ページの「クラスタメンバーを追加する」を参照してください。
 10. 必要であれば、アプリケーションのデータベースへの接続を構成します。
 - a. JDBC Provider を構成します。

37 ページの「JDBC Provider コンポーネントを作成する」を参照してください。
 - b. データソースを構成します。

39 ページの「データソースコンポーネントを作成する」を参照してください。
 11. Java 仮想マシン (JVM) コンポーネントを構成します。

41 ページの「JVM コンポーネントを構成する」を参照してください。
 12. アプリケーションファイルを取得します。
 13. ターゲットのアプリケーションサーバーまたはクラスタにアプリケーションを配備します。

アプリケーションを配備するターゲットは、アプリケーションサーバーまたはクラスタのどちらでもかまいません。

52 ページの「エンタープライズアプリケーションのインストール」を参照してください。

WebSphere インフラストラクチャーコンポーネントの作成

WebSphere アプリケーションサーバーにアプリケーションを配備するには、まず、プロビジョニングシステムを使用して WebSphere コンポーネントをインストールするか、既存の WebSphere 構成を取得する必要があります。

▼ スタンドアロン WebSphere アプリケーションサーバーをインストールする

アプリケーションにサービスを提供できるようにアプリケーションサーバーインスタンスを設定するには、まず、スタンドアロンアプリケーションサーバーをインストールす

する必要があります。1台のスタンドアロンアプリケーションサーバーには、複数のアプリケーションサーバーインスタンスを格納できます。このスタンドアロンアプリケーションサーバーは単一のエンティティとして管理するか、配備マネージャーによって管理できます。アプリケーションサーバーについての情報はすべて、アプリケーションサーバーと(配備マネージャーを使用している場合は)配備マネージャーの両方に格納されます。

コンポーネントをインストールして、新しいスタンドアロンアプリケーションサーバーを作成するときには、次の作業も必要になります。

- WebSphere 5.1 アプリケーションソフトウェアのインストール
- スタンドアロンアプリケーションサーバーの構成
- スタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストの作成
- アプリケーションサーバーインスタンスごとに、コンポーネントと仮想ホストを作成します。

この手順を使用すると、プロビジョニングシステム内で、スタンドアロン WebSphere アプリケーションサーバーを作成したり、既存のスタンドアロンアプリケーションサーバーを登録したりできます。

注-この作業は、rootとして実行します。

始める前に スタンドアロンアプリケーションサーバーを作成するには、ユーザーは、当該コンポーネントが入っているフォルダに「Run Component Procedures」アクセス権を持つユーザーグループに属している必要があります。さらに、ユーザーは、当該コンポーネントを配備するホストセットに「Allow on Host Set」アクセス権を持っている必要があります。

- 1 **WebSphere** セッション変数 `WS_DEFAULT_USER` と `WS_DEFAULT_PASSWORD` が設定されていることを確認します。

セッション変数の詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第5章「セッション変数」を参照してください。

- 2 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 3 「**WebSphere Application Server for Standalone Systems: Install**」リンクをクリックします。プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 4 「**Run**」をクリックします。プランの「**Run**」ページが表示されます。

- 5 「Plan Parameters」領域で、配備する StandaloneInstall コンポーネントの変数設定を選択します。
- 当該コンポーネントの変数設定が確立されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定を選択できない場合は、「Select From List」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 新しい変数設定セットを作成するには、「Create Set」を選択します。
次のリストに、StandaloneInstall コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。ほとんどの変数はデフォルト値のままかまいません。

注-スタンドアロンアプリケーションサーバーのデフォルトのポート値を変更する場合は、配備マネージャーのポート値と衝突しないように注意してください。

変数セット名 必須。新たに作成する変数セットの名前。

installPath 必須。WebSphere 5.1 をインストールする場所。installPath のデフォルト値は、前回、WebSphere コンポーネントをインストールしたときに使用したインストールパスです。

注-installPath 変数の値は、/opt や c:mydir などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Windows リモートエージェントで installPath 変数を c/mydir に設定し、デフォルトのリモートエージェントディレクトリ c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\agent\c\mydir に配備されます。

installerHome 必須。スタンドアロンアプリケーションサーバーのインストールの場所。

注-パス名の後に余分な空白を入れないでください。

name 必須。スタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストの名前。

- ほかのコンポーネントの変数セットを使用するには、「Import Set」をクリックします。
変数セットのインポートの詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

- 6 「Plan Parameters」領域で、配備する「AppInstance」コンポーネントの「Default」変数セットを選択します。

注-新しい変数設定セットを作成する場合は、アプリケーションサーバーインスタンス名を変更しないでください。名前はserver1にする必要があります。wasServer コンポーネント変数をデフォルト値のserver1から変更していない場合は、新しい値が無視されます。アプリケーションサーバーインスタンスserver1がインストールされます。

- 7 ターゲットホストを選択します。
スタンドアロンアプリケーションサーバーは、ターゲットホストとして選択したりリモートエージェント上にインストールされます。

注-ターゲットホストは、com.sun.was#InstallTargetsHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 8 「Target Host Set」チェックボックスを選択解除します。
- 9 プロビジョニングシステム内で既存のスタンドアロンアプリケーションサーバーを取得している場合は、「markOnly Install」オプションを選択します。
このオプションを選択すると、既存のWebSphere 5.1 オブジェクトを表すコンポーネントを作成して、そのオブジェクトをプロビジョニングシステムを通じて管理できます。
- 10 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。
- 11 「Hosts」ページを表示して、スタンドアロンアプリケーションサーバーとアプリケーションサーバーインスタンスの仮想ホストが作成されていることを確認します。

▼ アプリケーションサーバーインスタンスを作成する

スタンドアロンアプリケーションサーバーを作成すると、自動的に1つのアプリケーションサーバーインスタンスserver1が作成されます。この手順は、追加のアプリケーションサーバーインスタンスを作成する必要がある場合に使用します。

この手順を使用すると、プロビジョニングシステム内で、アプリケーションサーバーインスタンスを作成したり、既存のアプリケーションサーバーインスタンスを取得したりできます。

注-この作業は、rootとして実行します。

始める前に アプリケーションサーバーインスタンスを作成するには、まず、スタンドアロンアプリケーションサーバーを作成する必要があります。詳細は、[26 ページの「スタンドアロン WebSphere アプリケーションサーバーをインストールする」](#)を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Application Server Instances: Install**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 4 「**Plan Parameters**」領域で、配備する AppInstance コンポーネントの変数設定を選択します。
新しいアプリケーションサーバーインスタンスごとに、一意の名前が必要です。新しいアプリケーションサーバーインスタンスごとに、その名前を示す新しい変数設定セットを作成する必要があります。
 - 当該コンポーネントの変数設定が確立されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定を選択できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「**Select Variable Settings From List**」ウィンドウが表示されます。
 - 新しい変数設定セットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、AppInstance コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。AppInstance 変数の設定は、主に、スタンドアロンアプリケーションサーバーの変数設定値に依存します。ほとんどの変数はデフォルト値のままでもかまいません。
変数セット名 必須。新たに作成する変数セットの名前。
name 必須。アプリケーションサーバーインスタンスの名前。
 - ほかのコンポーネントの変数セットを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。
変数セットのインポートの詳細については、『**Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド**』の「**プランを実行する**」を参照してください。
- 5 ターゲットホストを選択します。
アプリケーションサーバーインスタンスをスタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストにインストールします。

- 6 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 7 プロビジョニングシステム内で既存のスタンドアロンアプリケーションサーバーを取得している場合は、「**markOnly Install**」オプションを選択します。
このオプションを選択すると、既存の WebSphere 5.1 オブジェクトを表すコンポーネントを作成して、そのオブジェクトをプロビジョニングシステムを通じて管理できます。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
- 9 「**Hosts**」ページを表示して、新しいアプリケーションサーバーインスタンスの仮想ホストが作成されていることを確認します。

▼ 配備マネージャーをインストールする

複数のスタンドアロンアプリケーションサーバーが含まれる構成では、配備マネージャーを使用すると、これらのスタンドアロンアプリケーションサーバーを管理できます。配備マネージャーは、どのアプリケーションがどのアプリケーションサーバーインスタンスに配備されているかを追跡します。

この手順を使用すると、プロビジョニングシステム内で、配備マネージャーを作成したり、既存の配備マネージャーを登録したりできます。

注 - この作業は、root として実行します。

- 1 **WebSphere** セッション変数 `WS_DEFAULT_USER` と `WS_DEFAULT_PASSWORD` が設定されていることを確認します。
セッション変数の詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第 5 章「セッション変数」を参照してください。
- 2 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 3 「**Network Deployment Manager: Install**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 4 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。

5 「Plan Parameters」領域で、配備する NetworkDeploymentInstall コンポーネントの変数設定を選択します。

- 当該コンポーネントの変数設定が確立されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
- メニューから設定を選択できない場合は、「Select From List」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
- 新しい変数設定セットを作成するには、「Create Set」を選択します。
NetworkDeploymentInstall 変数の設定は、主に、スタンドアロンアプリケーションサーバーの変数設定値に依存します。

注- 配備マネージャーのデフォルトのポート値を変更する場合は、スタンドアロンアプリケーションサーバーのポート値と衝突しないように注意してください。

変数セット名	必須。新たに作成する変数セットの名前。
installPath	必須。WebSphere 配備マネージャーをインストールする場所。 installPath のデフォルト値は /opt/was51nd です。

注- installPath 変数の値は、/opt や c:mydir などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Windows リモートエージェントで installPath 変数を c:mydir に設定し、デフォルトのリモートエージェントディレクトリ c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\agent\c\mydir に配備されます。

installerHome	必須。配備マネージャーのインストーラの場合。
---------------	------------------------

注- パス名の後に余分な空白を入れないでください。

name	必須。配備マネージャーの仮想ホストの名前。
httpServerPort	通常の Web アクセスに必須。Web サーバーのポート番号。
httpsTrnsprtPort	安全な Web アクセスに必須。安全な Web サーバーのポート番号。
bootstrap	必須。ブートストラップのポート。スタンドアロンアプリケーションサーバーと配備マネージャーを同じリモートエー

ジェントにインストールする場合は、このポート番号を変更する必要があります。

- ほかのコンポーネントの変数セットを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。
変数セットのインポートの詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

- 6 ターゲットホストを選択します。
配備マネージャーをリモートエージェントにインストールします。

注-ターゲットホストは、com.sun.was#InstallTargetHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 8 プロビジョニングシステム内で既存のスタンドアロンアプリケーションサーバーを取得している場合は、「**markOnly Install**」オプションを選択します。
このオプションを選択すると、既存の WebSphere 5.1 オブジェクトを表すコンポーネントを作成して、そのオブジェクトをプロビジョニングシステムを通じて管理できます。
- 9 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
- 10 「**Hosts**」ページを表示して、新しい配備マネージャーの仮想ホストが作成されていることを確認します。

▼ 配備マネージャーにノードを追加する

どのアプリケーションがどのスタンドアロンアプリケーションサーバーに配備されているかを配備マネージャーが追跡するには、まず、これらのスタンドアロンアプリケーションサーバーを配備マネージャーに追加する必要があります。このようにノードを配備マネージャーに追加するプロセスのことを「統合(フェデレーション)」と呼びます。

注-この作業は、rootとして実行します。

始める前に ノードを配備マネージャーに追加するには、まず、配備マネージャーをインストールする必要があります。配備マネージャーをインストールする方法については、[31 ページ](#)の「[配備マネージャーをインストールする](#)」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Network Deployment Manager: Federate**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 4 ターゲットホストを選択します。
統合(フェデレーション)するスタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストを選択します。
- 5 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 6 スタンドアロンアプリケーションサーバーに統合(フェデレーション)する配備マネージャーの仮想ホストの名前を入力します。
- 7 連携ノードから配備マネージャーにアプリケーションをコピーする場合は、「**includeApps**」オプションが「**true**」に設定されていることを確認します。
- 8 既存の連携スタンドアロンアプリケーションサーバーの表示を作成する場合は、「**markOnly Install**」フィールドを選択します。
このオプションを選択すると、既存の WebSphere 5.1 オブジェクトを表示させて、そのオブジェクトをプロビジョニングシステムを通じて管理できます。
- 9 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
連携後、スタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストのホストタイプ属性 `cellName` と `dmHost` は、適切な情報で更新されます。

▼ WebSphere クラスタを作成する

プロビジョニングシステムを通じて WebSphere クラスタを作成するときには、クラスタメンバーを格納できる空のコンテナを作成します。クラスタメンバーをクラスタに追加する方法については、36 ページの「[クラスタメンバーを追加する](#)」を参照してください。

注- この作業は、`root` として実行します。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。

- 2 「**Cluster Management: Create**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 「**Plan Parameters**」領域で、配備するCluster コンポーネントの変数設定を選択します。
新しいクラスタごとに一意の名前が必要です。新しいクラスタごとに、その名前を示す新しい変数設定セットを作成する必要があります。
 - 当該コンポーネントの変数設定が確立されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定を選択できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 新しい変数設定セットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、cluster コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。ほとんどの変数はデフォルト値のままかまいません。
変数セット名 必須。新たに作成する変数セットの名前。
name 必須。クラスタの名前。
clusterSPSName 必須。クラスタの仮想ホストの名前。
 - ほかのコンポーネントの変数セットを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。
変数セットのインポートの詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。
- 5 ターゲットホストを選択します。
クラスタを管理する配備マネージャーの仮想ホストを選択します。
- 6 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 7 既存のクラスタの表示を作成する場合は、「markOnly Install」オプションを選択します。
このオプションを選択すると、既存の WebSphere 5.1 オブジェクトを表示させて、そのオブジェクトをプロビジョニングシステムを通じて管理できます。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

- 9 「**Hosts**」ページを表示して、クラスタの仮想ホストが作成されていることを確認します。

▼ クラスタメンバーを追加する

この手順を使用すると、選択したクラスタに新しいクラスタメンバーを作成できます。

注-この作業は、rootとして実行します。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Cluster Member Management: Join**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 4 「**Plan Parameters**」領域で、配備するClusterMemberコンポーネントの変数設定を選択します。
新しいクラスタメンバーごとに一意の名前が必要です。新しいクラスタメンバーごとに、その名前を示す新しい変数設定セットを作成する必要があります。
 - 当該コンポーネントの変数設定が確立されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定を選択できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「**Select Variable Settings From List**」ウィンドウが表示されます。
 - 新しい変数設定セットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、ClusterMemberコンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。ほとんどの変数はデフォルト値のままでかまいません。
変数セット名 必須。新たに作成する変数セットの名前。
name 必須。クラスタメンバーの名前。
cmemberSPSName 必須。クラスタメンバーの仮想ホストの名前。

- ほかのコンポーネントの変数セットを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。
変数セットのインポートの詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。
- 5 ターゲットホストを選択します。
クラスタメンバーを追加するクラスタの仮想ホストを選択します。
- 6 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 7 既存のクラスタメンバーを表すコンポーネントを作成している場合は、「**markOnly Install**」オプションを選択します。
このオプションを選択すると、既存の WebSphere 5.1 オブジェクトを表示させて、そのオブジェクトをプロビジョニングシステムを通じて管理できます。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
- 9 「**WebSphere 5.1 Common Tasks**」ページの「**View Cluster Members**」リンクをクリックして、クラスタメンバーが作成されていることを確認します。

WebSphere 5.1 環境の構成

WebSphere 3.0 プラグインを使用すると、WebSphere 5.1 環境のさまざまな点を構成するコンポーネントを作成できます。この節では、次の作業について説明します。

- 37 ページの「**JDBC Provider** コンポーネントを作成する」
- 38 ページの「**JDBC Provider** コンポーネントをインストールする」
- 39 ページの「**データソース**コンポーネントを作成する」
- 40 ページの「**データソース**コンポーネントをインストールする」
- 41 ページの「**JVM** コンポーネントを構成する」
- 42 ページの「**JVM** コンポーネントをインストールする」
- 43 ページの「**J2C** 認証エイリアスを作成する」
- 43 ページの「**J2C** 認証エイリアスを削除する」

▼ **JDBC Provider** コンポーネントを作成する

JDBC プロバイダコンポーネントを作成して、インストールします。38 ページの「**JDBC Provider** コンポーネントをインストールする」を参照してください。

注-JDBCプロバイダを連携ノードから参照およびエクスポートする場合は、参照する対象として配備マネージャーを選択します。JDBCプロバイダを非連携ノードから参照およびエクスポートする場合は、参照する対象として「Standalone Install」を選択します。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**JDBC Provider: Create**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「**Check In**」ページが表示されます。
- 3 (省略可能) **JDBC Provider** のラベルと説明を入力します。
- 4 参照する対象を選択します。
- 5 「**Open Highlighted Item**」リンクをクリックします。
- 6 **JDBC** プロバイダのリストから、**JDBC** プロバイダを選択します。
- 7 「**Check in Selected Item**」ボタンをクリックします。
「**Components**」ページが表示されます。
- 8 (省略可能) コンポーネント名を変更します。
- 9 「**Continue to Check In**」をクリックします。
「**Components**」ページが表示されます。
- 10 コンポーネント名をクリックします。
- 11 インストールプロシージャの「**Run**」リンクをクリックします。

▼ **JDBC Provider** コンポーネントをインストールする

始める前に インストールする **JDBC Provider** コンポーネントは、プロビジョニングシステム内に存在する必要があります。37 ページの「**JDBC Provider** コンポーネントを作成する」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**JDBC Provider: View All**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「**Edit**」ページが表示されます。

- 3 コンポーネントを探すとき、必要であれば、ルートフォルダに移動して、「**Show Flat View**」オプションを選択します。
プロビジョニングシステムで登録されているすべての JDBC Provider コンポーネントが「Component」テーブルに表示されます。
- 4 インストールする JDBC Provider コンポーネントの行で、「**Details**」をクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」テーブルで、「**Default: Install**」プロシージャを選択して、「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 6 変数セットを選択します。
- 7 ターゲットホストを選択します。
次のいずれか1つのホストにデータソースコンポーネントを割り当てます。
 - スタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホスト
 - 配備マネージャーの仮想ホスト
 - クラスタメンバーの仮想ホスト
 - アプリケーションサーバーインスタンスの仮想ホスト
- 8 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 9 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ データソースコンポーネントを作成する

データソースコンポーネントを作成して、インストールします。40 ページの「[データソースコンポーネントをインストールする](#)」を参照してください。

注-データソースを連携ノードから参照およびエクスポートする場合は、参照する対象として配備マネージャーを選択します。データソースを非連携ノードから参照およびエクスポートする場合は、参照する対象として「Standalone node」を選択します。

始める前に データソースコンポーネントを作成するには、まず、JDBC プロバイダコンポーネントを作成してインストールする必要があります。37 ページの「[JDBC Provider コンポーネントを作成する](#)」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。

- 2 「**Data Source: Create**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「Edit」ページが表示されます。
- 3 「**Data Source Browser**」で、連携ノードをブラウズするには「**Deployment Manager**」を選択し、非連携ノードをブラウズするには「**Standalone**」を選択します。
- 4 「**Open Highlighted Item**」リンクをクリックします。
- 5 「**DataSource path**」を選択します。
- 6 「**Check In Selected Item**」ボタンをクリックします。
- 7 (省略可能)コンポーネントの名前を変更します。
- 8 「**Continue to Check In**」をクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 9 コンポーネント名をクリックします。
- 10 インストールプロシージャの「**Run**」リンクをクリックします。

▼ データソースコンポーネントをインストールする

始める前に インストールする Data Source コンポーネントは、プロビジョニングシステム内に存在する必要があります。40 ページの「[データソースコンポーネントをインストールする](#)」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Data Source: View All**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「Edit」ページが表示されます。
- 3 コンポーネントを探すとき、必要であれば、ルートフォルダに移動して、「**Show Flat View**」オプションを選択します。
プロビジョニングシステム内で登録されているすべてのデータソースコンポーネントが「Component」テーブルに表示されます。
- 4 インストールする Data Source コンポーネントの行で、「**Details**」をクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。

- 5 「**Component Procedures**」テーブルで、「**Default: Install**」プロシージャを選択して、「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 6 変数セットを選択します。
- 7 ターゲットホストを選択します。
次のいずれか1つのホストにデータソースコンポーネントを割り当てます。
 - スタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホスト
 - 配備マネージャーの仮想ホスト
 - クラスタメンバーの仮想ホスト
 - アプリケーションサーバーインスタンスの仮想ホスト
- 8 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 9 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ JVM コンポーネントを構成する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**JVM: Configure**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「**Edit**」ページが表示されます。
- 3 新しいJVMコンポーネント名を入力します。
- 4 (省略可能)JVMのラベルと説明を入力します。
- 5 コンポーネントの変数の値を変更して、「**Check In**」をクリックします。
次のリストに、コンポーネントの変数のうち、更新できる変数を示します。ほとんどの変数はデフォルト値のままでかまいません。
initHeapSize 必須。初期ヒープサイズ。
maxHeapSize 必須。最大ヒープサイズ。
- 6 デフォルトのフォルダを使用しない場合、「**Change Folder**」リンクをクリックして、**Data Source**コンポーネントを格納するフォルダを選択します。
「**Change Folder**」ウィンドウでフォルダを選択して、「**Change to Selected Folder**」をクリックします。

注-プラグインが所有するフォルダには、新しいコンポーネントを作成できません。

- 7 「**Continue to Check In**」をクリックします。
「Components」ページが表示されます。

▼ JVM コンポーネントをインストールする

始める前に インストールする JVM コンポーネントは、プロビジョニングシステム内に存在する必要があります。41 ページの「[JVM コンポーネントを構成する](#)」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**JVM: View Configurations**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「Edit」ページが表示されます。
- 3 コンポーネントを探すとき、必要であれば、ルートフォルダに移動して、「**Show Flat View**」オプションを選択します。
プロビジョニングシステム内で登録されているすべての JVM コンポーネントが「Component」テーブルに表示されます。
- 4 インストールする JVM コンポーネントの行で、「**Details**」をクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」テーブルで、「**Default: Install**」プロシージャーを選択して、「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 6 変数セットを選択します。
- 7 ターゲットホストを選択します。
ターゲットホストは、アプリケーションサーバーまたはクラスタメンバーのどちらかです。
- 8 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 9 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ J2C 認証エイリアスを作成する

認証エイリアスを作成します。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**J2C Authentication Alais: Create**」リンクをクリックします。
- 3 現在のインストールから選択します。
- 4 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
- 5 プラン変数を入力します。
 - 認証エイリアスの名前
 - J2C 認証データユーザー ID
 - 対象の Enterprise Information System で使用するパスワード
 - (省略可能) エイリアスの説明
 - スタンドアロンの場合は、呼び出し名またはノード名
 - WebSphere ディレクトリ
 - コマンドを実行するユーザー
- 6 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ J2C 認証エイリアスを削除する

認証エイリアスを削除します。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**J2C Authentication Alais: Delete**」リンクをクリックします。
- 3 現在のインストールから選択します。
- 4 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
- 5 プラン変数を入力します。
 - 認証エイリアスの名前
 - スタンドアロンの場合は、呼び出し名またはノード名
 - WebSphere ディレクトリ
 - コマンドを実行するユーザー

- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

WebSphere 5.1 インフラストラクチャーコンポーネントの管理

プロビジョニングシステムを使用すると、WebSphere 5.1 インフラストラクチャーコンポーネントをインストールするだけでなく、これらのコンポーネントを起動、停止、およびアンインストールできます。この節では、次の作業について説明します。

- 44 ページの「スタンドアロンシステムのアプリケーションサーバーを起動または停止する」
- 45 ページの「スタンドアロンシステムのアプリケーションサーバーをアンインストールする」
- 45 ページの「アプリケーションサーバーインスタンスを起動または停止する」
- 46 ページの「アプリケーションサーバーインスタンスをアンインストールする」
- 47 ページの「配備マネージャーを起動または停止する」
- 47 ページの「配備マネージャーをアンインストールする」
- 48 ページの「クラスタを起動または停止する」
- 48 ページの「クラスタをアンインストールする」
- 49 ページの「クラスタメンバーを削除する」

▼ スタンドアロンシステムのアプリケーションサーバーを起動または停止する

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「WebSphere Application Server for Standalone Systems: Start or Stop」リンクをクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Component Procedures」テーブルで、「startServer」または「stopServer」プロシージャを選択して、「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページに、スタンドアロンアプリケーションサーバーがインストールされているホストが表示されます。
- 4 起動または停止するホストを選択します。
現在のインストールリストから、ホストとそのインストールパスを選択します。
- 5 「Run Selected Installations」をクリックします。

- 6 プランの詳細が間違っていないことを確認して、「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ スタンドアロンシステムのアプリケーションサーバーをアンインストールする

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**WebSphere Application Server for Standalone Systems: Uninstall**」リンクをクリックします。プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページに、スタンドアロンアプリケーションサーバーがインストールされているリモートエージェントが表示されます。
- 4 ターゲットホストを選択します。
スタンドアロンアプリケーションサーバーがインストールされているリモートエージェントを選択します。
- 5 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 6 アンインストールするアプリケーションサーバーのバージョンを指定するには、アプリケーションサーバーのインストールパスを入力します。
この値を省略した場合、前回インストールしたコンポーネントが(パスに関係なく)使用されます。コンポーネントが解決される前に、この値はユニバーサル形式に変換されます。この属性は単純な代入変数であると見なすことができます。
- 7 スタンドアロンアプリケーションサーバーをプロビジョニングシステムから削除し、そのアプリケーションサーバーを **WebSphere** 環境で実行し続ける場合、「**markOnly**」オプションを選択します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ アプリケーションサーバーインスタンスを起動または停止する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。

- 2 「**Application Server Instances: Start or Stop**」リンクをクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Component Procedures**」テーブルで、「**startAppInstance**」または「**stopAppInstance**」プロシージャを選択して、「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 アプリケーションサーバーインスタンスがインストールされているスタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストを選択します。
- 5 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
- 6 プランの詳細が間違っていないことを確認して、「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ アプリケーションサーバーインスタンスをアンインストールする

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Application Server Instances: Uninstall**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 ターゲットホストを選択します。
アンインストールするスタンドアロンアプリケーションサーバーの仮想ホストを選択します。
- 5 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 6 アンインストールするアプリケーションインスタンスのインストールパスを入力します。
この値を省略した場合、前回インストールしたコンポーネントが(パスに関係なく)使用されます。コンポーネントが解決される前に、この値はユニバーサル形式に変換されます。この属性は単純な代入変数であると見なすことができます。

- 7 アプリケーションサーバーインスタンスをプロビジョニングシステムから削除し、そのアプリケーションサーバーインスタンスを **WebSphere** 環境で実行し続ける場合、「markOnly」オプションを選択します。
- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ 配備マネージャーを起動または停止する

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「Network Deployment Manager: Start or Stop」リンクをクリックします。コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Component Procedures」テーブルで、「startServer」または「stopServer」プロシージャを選択して、「Run」をクリックします。プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 配備マネージャーをインストールする仮想ホストを選択します。
- 5 「Run Selected Installations」をクリックします。
- 6 プランの詳細が間違っていないことを確認して、「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ 配備マネージャーをアンインストールする

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「Network Deployment Manager: Uninstall」リンクをクリックします。プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Run」をクリックします。プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 配備マネージャーをインストールするリモートエージェントを選択します。

- 5 アンインストールする配備マネージャーのインストールパスを入力します。
この値を省略した場合、前回インストールしたコンポーネントが(パスに関係なく)使用されます。コンポーネントが解決される前に、この値はユニバーサル形式に変換されます。この属性は単純な代入変数であると見なすことができます。
- 6 配備マネージャーをプロビジョニングシステムから削除し、その配備マネージャーを **WebSphere** 環境で実行し続ける場合、「markOnly」オプションを選択します。
- 7 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ クラスタを起動または停止する

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「Cluster Management: Start or Stop」リンクをクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Component Procedures」テーブルで、「startCluster」または「stopCluster」プロシージャを選択して、「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 起動または停止するクラスタを選択します。
現在のインストールリストから、配備マネージャーとクラスタ名を選択します。
- 5 「Run Selected Installations」をクリックします。
- 6 プランの詳細が間違っていないことを確認して、「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ クラスタをアンインストールする

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「Cluster Management: Remove」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。

- 4 ターゲットホストを選択します。
配備マネージャーの仮想ホストを選択します。
- 5 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 6 アンインストールするクラスタのインストールパスを入力します。
この値を省略した場合、前回インストールしたコンポーネントが(パスに関係なく)使用されます。コンポーネントが解決される前に、この値はユニバーサル形式に変換されます。この属性は単純な代入変数であると見なすことができます。
- 7 クラスタをプロビジョニングシステムから削除し、そのクラスタを **WebSphere** 環境で実行し続ける場合、「**markOnly**」オプションを選択します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ クラスタメンバーを削除する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Cluster Member Management: Leave**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 4 クラスタの仮想ホストをターゲットホストとして選択します。
- 5 「**Target Host Set**」チェックボックスを選択解除します。
- 6 クラスタメンバーをプロビジョニングシステムから削除し、そのクラスタメンバーを **WebSphere** 環境で実行し続ける場合、「**markOnly**」オプションを選択します。
- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebSphere 5.1で作業するときのコマンド行インタフェースの使用法

Sun N1 Service Provisioning System コマンド行インタフェースの使用法

デフォルトでは、プロビジョニングシステムのコマンド行インタフェースは次のディレクトリにあります。/opt/SUNWn1sps/N1_Service_Provisioning_system_5.2/cli/bin/cr_cli

WebSphere 3.0 プラグインのオブジェクトは、/com/sun/was/5.1 フォルダにあります。

プラグインのコンポーネントの内容は、その他の独自のコンポーネントまたはプランと同様に、必要に応じて変更して使用することが可能です。しかし、コンポーネントまたはプランを変更するには、まず、そのコンポーネントまたはプランを新しいフォルダに保存してから変更する必要があります。プロビジョニングシステムのコマンド行インタフェースの使用法についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 コマンド行インタフェース (CLI) リファレンスマニュアル』の第1章「コマンド行インタフェースの使用」を参照してください。

WebSphere 5.1 の wsadmin スクリプトの使用法

WebSphere 5.1 スクリプト用プログラム wsadmin は Sun N1 Service Provisioning System を通じて実行できます。このスクリプト用プログラムの使用法についての詳細は、[IBM WebSphere 5.1 のマニュアル](#)を参照してください。

▼ wsadmin スクリプトを実行する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Command Line Interface: Run Command**」リンクをクリックします。プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
- 4 ターゲットホストを選択します。スタンドアロンアプリケーションサーバーまたは配備マネージャの仮想ホストを選択できます。
- 5 wsadmin スクリプトへの引数を「**Plan Variables**」フィールドに入力します。

6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

例 4-1 wsadmin スクリプトによるクラスタの作成

この例では、wsadmin スクリプトの入力を示します。

コマンド行を使用してクラスタを作成する場合、次の文字列を「Enter the Arguments to wsadmin Script」フィールドに入力します。

```
-c 'set cell [$AdminConfig getid /Cell:cellname/]'  
-c '$AdminConfig create ServerCluster $cell {{name clustername}}'  
-c '$AdminConfig save'
```

この例では、*cellname* は既存のセルの名前で、*clustername* は作成するクラスタの名前です。

WebSphere アプリケーションを配備するためのコンポーネントタイプの使用法

WebSphere プラグインには、WebSphere 固有のコンポーネントタイプがいくつか含まれています。これらのコンポーネントタイプを使用すると、最も一般的な WebSphere アプリケーションコンポーネントの多くをすばやくモデル化したり、インストール、アンインストール、エクスポート、およびスナップショットの動作を特定のリソースに自動的に関連付けたりできます。コンポーネントタイプの多くは、このソフトウェアがサーバーやクラスタを作成および管理するときに使用されます。結果として、定期的に使用できるコンポーネントタイプは1つしかありません。これについては、次の節を参照してください。

- 51 ページの「エンタープライズアプリケーション (EAR) コンポーネントタイプ」

注 - WebSphere プラグインがインストールできるのは、IBM アセンブルツールを使用してアセンブルした EAR ファイルだけです。これらのファイルには、プラグインが必要とする構成設定が含まれています。

エンタープライズアプリケーション (EAR) コンポーネントタイプ

このコンポーネントタイプは、エンタープライズアプリケーションをモデル化します。このコンポーネントは、エンタープライズアプリケーションアーカイブ (EAR) または EAR の拡張バージョンをパッケージとして格納できます。

エンタープライズアプリケーションのブラウズ

プロセスを開始する手順は次のとおりです。

1. ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
2. 「Enterprise Application (EAR): Create」リンクをクリックします。

このコンポーネントタイプのエンタープライズアプリケーションを選択するときには、次のブラウザのうちの1つを使用できます。

- WebSphere Appserver ブラウザ。このブラウザでは、インストールされているアプリケーションとそれに関連する設定の1つを選択できます。Appserver ブラウザは、アプリケーションサーバーにあるエンタープライズアプリケーションのアルファベット順のリストを提供します。このリストからコンポーネント用のエンタープライズアプリケーションを1つ選択できます。
- ファイルシステムのブラウザ。コンポーネントを作成するための (設定を含まない) EAR ファイルを選択できます。ファイルシステムのブラウザは、ファイルとディレクトリのリストを提供します。このリストから EAR ファイルを選択できます。これらのファイルをそのまま表示しても、*.ear をブラウザに入力してもかまいません。

注 - WebSphere プラグインがインストールできるのは、IBM アセンブルツールを使用してアセンブルした EAR ファイルだけです。これらのファイルには、プラグインが必要とする構成設定が含まれています。

エンタープライズアプリケーションのインストール

エンタープライズアプリケーションコンポーネントをインストールするには、WebSphere アプリケーションサーバーインスタンスまたはクラスタをターゲットホストとして使用する必要があります。インストールプロセスでは、主に、次の3つの作業を実行します。

1. EAR ファイルをターゲットホストにインストールします。
2. EAR ファイルを WebSphere Application Server で登録します。

エンタープライズアプリケーションをインストールするには、そのアプリケーションの「Details」ページに移動して、Install コンポーネントプロシージャを実行します。

注 - これらの変更を有効にするには、アプリケーションをインストールしたあとでアプリケーションサーバーの再起動が必要な場合があります。

エンタープライズアプリケーションのアンインストール

エンタープライズアプリケーションコンポーネントをアンインストールすると、それ以降、そのエンタープライズアプリケーションは仮想ホストをターゲットとしなくなります。

す。エンタープライズアプリケーションがいずれにおいてもターゲットとされない場合、エンタープライズアプリケーションコンポーネントはアプリケーションサーバーから登録解除されます。

エンタープライズアプリケーションをアンインストールするには、そのアプリケーションの「Details」ページに移動して、Uninstall コンポーネントプロシージャを実行します。

エンタープライズアプリケーションの起動と停止

プロビジョニングシステムにインストールされているエンタープライズアプリケーションは起動および停止できます。

▼ エンタープライズアプリケーションを起動または停止する

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「Enterprise Applications (EAR): View All」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 起動または停止するエンタープライズアプリケーションを選択して、「Details」をクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 4 「Component Procedures」テーブルで、「Start」または「Stop」プロシージャを選択して、「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 5 起動または停止するエンタープライズアプリケーションをホストするアプリケーションサーバーの仮想ホストを選択します。
- 6 「Run Selected Installations」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 7 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

Web Application (WAR) ファイルと Java Archive (JAR) ファイルのインストール

WebSphere は WAR ファイルと JAR ファイルをサポートしません。WAR ファイルまたは JAR ファイルをプロビジョニングシステムを通じてインストールする必要がある場合

は、WebSphere Assemble ツールを使用して、このファイルを EAR 形式に変換します。ファイルをエクスポートしたあと、プロビジョニングシステムを使用すると、そのファイルを配備できます。

WebSphere 5.1 デモの実行

RDBMS 環境が、あらかじめインストールされている必要があります。

- 54 ページの「Oracle RDBMS でデモを実行する」
- 56 ページの「DB2 RDBMS でデモを実行する」

▼ Oracle RDBMS でデモを実行する

デモのインストールは、次の 3 段階で行います。

- プランを実行し、リソースを作成します。インストールされている RDBMS に応じてプランを選択します。
- EAR アプリケーションをインストールします。
- アプリケーションサーバーを再起動します。

始める前に デモを実行する前に、データベースをインストールする必要があります。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebSphere 5.1」をクリックします。
- 2 「Demo Application Configuration for Oracle RDBMS: Configure」リンクをクリックします。プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Run」をクリックします。
- 4 「Select From List for the TradeOracleJDBC component」をクリックします。
 - a. 「Create Set」リンクをクリックします。
 - b. セット名を入力します。
 - c. dbClasspath のデフォルト値を変更します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. 「選択」をクリックします。

- 5 「**Select From List for the TradeOracleDataSource component**」をクリックします。
 - a. 「**Create Set**」リンクをクリックします。
 - b. セット名を入力します。
 - c. `url` 変数の値を入力します。
 - d. 「**Save and Select**」をクリックします。
- 6 対象ホストを選択します。
- 7 配備マネージャーのセル名を入力するか、スタンドアロンインストールのノード名を入力します。
- 8 RDBMS データベースのユーザー ID を `userID` に、RDBMS データベースのユーザー ID のパスワードを `password` に変更します。
- 9 (省略可能) JMS リソースを作成していない場合は、「**Create JMS Resources**」チェックボックスを選択し、作成スクリプトの場所を入力します。
- 10 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
- 11 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 12 「**Enterprise Applications (EAR): Create**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 13 「`trade3.ear`」に移動します。
- 14 「**Check In Selected Item**」ボタンをクリックします。
- 15 「**Check In**」ボタンをクリックします。
- 16 アーカイブファイル用に作成したコンポーネントをクリックします。
- 17 「**Run action of Install**」をクリックします。
- 18 変数 `installName` を `trade3` に変更します。
- 19 変数 `dbType` を、使用するデータベースタイプに変更します。
- 20 「保存」をクリックします。

- 21 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 22 「**Application Server Instances**」で、アプリケーションサーバーインスタンスを停止および起動します。
- 23 ブラウザウィンドウを開き、**http://servername:9080/trade**を表示します。

▼ **DB2 RDBMS** でデモを実行する

デモのインストールは、次の3段階で行います。

- プランを実行し、リソースを作成します。インストールされたプランのRDBMSを選択します。
- EARアプリケーションをインストールします。
- アプリケーションサーバーを再起動します。

始める前に デモを実行する前に、データベースとTrade3アプリケーションをインストールしておく必要があります。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Demo Application Configuration for DB2 RDBMS: Configure**」リンクをクリックします。プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
- 4 「**Select From List for the TradeDB2JDBC component**」をクリックします。
 - a. 「**Create Set**」リンクをクリックします。
 - b. セット名を入力します。
 - c. dbClasspathのデフォルト値を変更します。
 - d. 「**Save and Select**」をクリックします。
- 5 「**Select From List for the TradeDB2DataSource component**」をクリックします。
 - a. 「**Create Set**」リンクをクリックします。

- b. セット名を入力します。
 - c. db2profile 変数の値を入力します。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. 「選択」をクリックします。
- 6 対象ホストを選択します。
 - 7 配備マネージャーのセル名を入力するか、スタンドアロンインストールのノード名を入力します。
 - 8 RDBMS データベースのユーザー ID を **userID** に、RDBMS データベースのユーザー ID のパスワードを **password** に変更します。
 - 9 JMS リソースを作成していない場合は、「**Create JMS Resources**」チェックボックスを選択し、作成スクリプトの場所を入力します。
 - 10 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
 - 11 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
 - 12 「**Enterprise Applications (EAR): Create**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
 - 13 **EARFileCT** パスに移動します。
 - 14 「**Check In Selected Item**」ボタンをクリックします。
 - 15 「**Check In**」ボタンをクリックします。
 - 16 アーカイブファイル用に作成したコンポーネントをクリックします。
 - 17 「**Run action of Install**」をクリックします。
 - 18 変数 **installName** を **trade3** に変更します。
 - 19 変数 **dbType** を、使用するデータベースタイプに変更します。
 - 20 「保存」をクリックします。

- 21 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 22 「**Application Server Instances**」で、アプリケーションサーバーインスタンスを停止および起動します。
- 23 ブラウザウィンドウを開き、**http://servername:9080/trade**を表示します。

▼ **Oracle RDBMS** デモのリソースを削除する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Demo Application Configuration for Oracle RDBMS: Remove Resources**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
- 4 対象ホストを選択します。
- 5 プラン変数を入力します。
 - スタンドアロンの場合は、呼び出し名またはノード名
 - コマンドを実行するユーザー
- 6 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ **DB2 RDBMS** デモのリソースを削除する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebSphere 5.1**」をクリックします。
- 2 「**Demo Application Configuration for DB2 RDBMS: Remove Resources**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
- 4 対象ホストを選択します。

- 5 プラン変数を入力します。
 - スタンドアロンの場合は、呼び出し名またはノード名
 - コマンドを実行するユーザー
- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

プラン

WebSphere プラグインは、アプリケーションサーバー、配備マネージャー、およびクラスターのインストールと削除に関連するタスクの多数を、プランの内容に従って実行します。

WebSphere 3.0 プラグインのプランは、`/com/sun/was/5.1` フォルダにあります。

障害追跡

プロビジョニングソフトウェアを通じて WebSphere を管理しているときに問題が発生すると、次のようなメッセージが画面に表示されて、問題が存在することがユーザーに通知されます。

```
Problems encountered during plan run or preflight
```

```
The plan (or preflight) "/com/sun/was/5.1/DeleteCluster" finished  
with 1 failed host(s). (017034)
```

```
Cannot perform operation on component component  
/com/sun/was/5.1/Cluster because it was not installed on host sun-1 (017057)  
Unable to resolve installed component for component  
/com/sun/was/5.1/Cluster. (602021)
```

この例のメッセージは簡単に解読できますが、必ずしもすべてのメッセージがこのように読みやすいわけではありません。特定の問題についての詳細な情報を調べるには、「Run History Details」リンクに従います。最後のエラーブロックまで掘り下げて、`stderr` と `stdout` のエラー状況についての出力を表示します。

WebSphere 3.0 プラグインのアンインストール

▼ WebSphere 3.0 プラグインをアンインストールする

始める前に プラグインが所有するオブジェクトをプロビジョニングシステムが使用している場合、そのプラグインはアンインストールできません。

プラグインをアンインストールするには、admin ユーザーグループのメンバーである必要があります。

- 1 プラグインが所有するすべてのオブジェクトが使用されていないことを確認します。次のコンポーネントは、インストールされているホストからアンインストールする必要があります。

- WebSphere アプリケーション
- WebSphere アプリケーションサーバー
- 配備マネージャー
- クラスタ
- クラスタメンバー

プラグインが所有するオブジェクトをプロビジョニングシステムが使用している場合、そのプラグインを削除できません。

- 2 ブラウザインタフェースの「**Application Deployment**」セクションで、「**Plans**」をクリックします。
- 3 必要であれば、/com/sun/was/5.1 フォルダに移動します。
- 4 「UninstallSystemServicesPlan」を選択して、「**Details**」をクリックします。プランの「Details」ページが表示されます。
- 5 「**Run**」をクリックします。
- 6 com.sun.was#InstallTargetHS ターゲットホストセットが選択されていることを確認します。
- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。WebSphere システムサービスが削除されます。
- 8 ブラウザインタフェースの「**Administrative**」セクションで、「**Plug-ins**」をクリックします。

- 9 アンインストールするプラグインを選択して、「**Details**」をクリックします。
プラグインの「**Details**」ページが表示されます。
- 10 「**Details**」ページの一番下にある「**Delete**」をクリックします。
本当にプラグインを削除するのかが確認されます。
- 11 「**Continue to Delete**」をクリックします。
プラグインが削除されたあと、「**Plug-in**」ページが更新されます。

索引

E

EAR, 「エンタープライズアプリケーション」を参照

J

JAR ファイル, 17

Java アーカイブ, 「JAR ファイル」を参照

Java 仮想マシン, 「JVM コンポーネント」を参照

JDBC Provider コンポーネント

インストール, 38-39

作成, 37-38

JVM コンポーネント

インストール, 42

構成, 41-42

W

WebSphere 3.0 プラグイン, アンインストール, 60-61

あ

アプリケーションサーバーインスタンス

アンインストール, 46-47

起動, 45-46

作成, 29-31

停止, 45-46

アンインストール

WebSphere 3.0 プラグイン, 60-61

アプリケーションサーバーインスタンス, 46-47

エンタープライズアプリケーション, 52-53

クラスタ, 48-49

スタンドアロンアプリケーションサーバー, 45

配備マネージャー, 47-48

い

インストール

JDBC Provider コンポーネント, 38-39

JVM コンポーネント, 42

エンタープライズアプリケーション, 52

データソースコンポーネント, 40-41

え

エンタープライズアプリケーション

アンインストール, 52-53

インストール, 52

起動, 53

コンポーネントタイプ, 51-54

停止, 53

ブラウズ, 52

き

起動

アプリケーションサーバーインスタンス, 45-46

エンタープライズアプリケーション, 53

クラスタ, 48

スタンドアロンアプリケーションサーバー

, 44-45

配備マネージャー, 47

- く
- クラスタ
- アンインストール, 48-49
 - 起動, 48
 - 作成, 34-36
 - 停止, 48
- クラスタノード, 「クラスタメンバー」を参照
- クラスタメンバー
- 削除, 49
 - 追加, 36-37
- 作成, 26-29
- 停止, 44-45
- こ
- 構成, JVM コンポーネント, 41-42
- コンポーネントタイプ, エンタープライズアプリケーション, 51-54
- さ
- 削除
- 「アンインストール」を参照
 - 「アンインストール」も参照
 - クラスタメンバー, 49
- 作成
- JDBC Provider コンポーネント, 37-38
 - アプリケーションサーバーインスタンス, 29-31
 - クラスタ, 34-36
 - スタンドアロンアプリケーションサーバー, 26-29
 - データソースコンポーネント, 39-40
 - 配備マネージャー, 31-33
- し
- 使用, プラン, 59
- 障害追跡, 59
- す
- スタンドアロンアプリケーションサーバー
- アンインストール, 45
 - 起動, 44-45
- つ
- 追加
- クラスタメンバー, 36-37
 - 配備マネージャーへのノードの, 33-34
- て
- 停止
- アプリケーションサーバーインスタンス, 45-46
 - エンタープライズアプリケーション, 53
 - クラスタ, 48
 - スタンドアロンアプリケーションサーバー, 44-45
 - 配備マネージャー, 47
- データソースコンポーネント
- インストール, 40-41
 - 作成, 39-40
- デモ
- DB2, 56-58
 - Oracle, 54-56
- と
- 統合 (フェデレーション), 「追加」を参照
- の
- ノード, 配備マネージャーへの追加, 33-34
- は
- 配備サーバーの要件, 14
- 配備マネージャー
- アンインストール, 47-48
 - 起動, 47
 - 作成, 31-33
 - 停止, 47

ふ

ブラウザ,エンタープライズアプリケーション, 52

プラグイン

 インポート, 19-21

 内容, 13-14

 配備サーバーの要件, 14

プラグインのインポート, 19-21

プラグインファイル

 インポート, 19-21

 の場所, 17

プラン,使用, 59

